



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	開発教授期の読み方教育
Author(s)	安, 直哉
Citation	[岐阜大学国語国文学] vol.[33] p.[23]-[32]
Issue Date	2007-01
Rights	
Version	岐阜大学教育学部, The Faculty of Education, Gifu University
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/7297">http://hdl.handle.net/20.500.12099/7297</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

# 開発教授期の読み方教育

安 直 哉

## 1 センテンス・メソッドの問題

明治十年代後半から、日本の教育は開発教授が主流になるというのが通説である。この開発教授期の読み方教育に関していくつかの側面から考察を加えることが本稿の目的である。

国語教育史におけるセンテンス・メソッドの隆盛については一般的に次のように捉えられている。

大正期になると、さまざまな「読みの指導理論」が提唱されるようになるが、その後の国語教育界に大きな影響力を残したのものとしては、垣内松三の『国語の力』(1922)を挙げなければならない。垣内は文学の〈読み〉の方法原理を、「文の形は想の形」とみる「形象理論」によって明らかにしようとした。垣内は『国語の力』において「センテンス・メソッド」を紹介し(以下略)(1)

このように、日本の国語教育界におけるセンテンス・メソッドの周知普及という点で垣内松三の業績の大なることは衆目の一致するところである。ただし、センテンス・メソッドを日本に最初に紹介したのは垣内松三ではない。飛田多喜雄は次のように指摘している。

もともとセンテンス・メソッドは、いわゆる文章法として欧米では早くから実施されていたものであった。たとえば、ジョーホット原著、高嶺秀夫訳『教育新論』(明治18年・普及舎)の中にも文章法の記述がある。(2)

そもそも欧州においては、センテンス・メソッドは18世紀に既に存在していた(3)。

飛田によると『国語の力』が発刊されるよりも約三十数年前の明治18年に、既にJohonnot, J.の著書の翻訳書によって、センテンス・メソッドは日本に紹介されていたというのである。

Johonnot, J. 著 *Principles and Practice of Teaching* は、開発教授の方法論を説いた書物である。同書の邦訳紹介によって、開発教授は日本に広く知れ渡った。同書的全訳としては高嶺秀夫訳(1885-1886)『教育新論』と有賀長雄訳注(1885)『如氏教育学』の二種がそれぞれ出版されている。

## 2. Johonnotの著書にみるセンテンス・メソッド

飛田の指摘を受け、『教育新論』中の「文章法」の記述を探してみた。『教育新論』巻四の第14章「一般ノ課程」中の「(三) 初等科」「第三級」に次のような記述がある。

読方練習ヲ始ムルニハ、或ハ言辞法ニ依リ、或ハ文章法ニ依ルモ可ナリ (4)

文章法が単独で提唱されているわけではなく、言辞法でも文章法でもよい、という両論併記のかたちで示されたのである。

同一の箇所が有賀長雄訳注『如氏教育学』では次のように訳されている。

素読演習ハ、端緒ヲ単語ニ開クノ法ヲ取ルモ或ハ又句節ニ開クノ法ヲ取ルモ可ナリ。

(5)

有賀は「文章法」という言葉を用いず、「句節ニ開クノ法」と訳した。ではJohonnotの原典ではこの一文はどのようになっていたのであろうか。以下の通りである。

Reading-exercises may be introduced by either the word or the sentence method. (6)

入門期の読みの練習はワード・メソッドに拠ってもセンテンス・メソッドに拠ってもどちらでもよい、ということ述べている。Johonnot, J. 著*Principles and Practice of Teaching*によってセンテンス・メソッドは日本に紹介された。しかしその翻訳において、高嶺は「文章法」という、その後広く用いられていく訳語をあてたのに対して、有賀は「句節ニ開クノ法」という、その本質を必ずしも充分には伝えきれない訳語を用いたのであった。

では同書中にセンテンス・メソッドについて説明した箇所があるだろうか。あえて挙げるとすれば次の箇所である。

Each sentence read should be the embodiment of a thought which the pupil thoroughly understands, and should be delivered precisely as it should be spoken. The practice of allowing the words of a reading-lesson to be pronounced separately should never be permitted. (7)

この部分を『教育新論』では次のように訳している。

文章ノ誦読ハ、宜シク其章句ヲシテ総ベテ生徒ノ十分理解スル所ノ思想ヲ表出スルモノヲラシメ、且ツ其章句ヲ誦読スルヤ、恰モ談話スルト同一ナラシメザル可ラズ、読本中ノ言詞ヲ一字ツツ発音スル風習ハ、断ジテ之ヲ許スベカラズ。(8)

また『如氏教育学』では同じ箇所を次のように訳している。

句節読法ニ於テハ、誦読ニ供スル句節ヲシテ、必ズ生徒ノ十分ニ理會スル所ノ思想ヲ表示スル者ナラシメ、且ツ誦読ノ法ヲシテ同一句節ヲロニ言フトキト、更ニ異ナル事無カラシム可キナリ。読本ニ載スル言詞ノ音訓ヲ以テ恰モ平生之ヲロニ言フト

キト異ナルモノ、如ク為スヲ許スノ法ハ、決シテ取ル可キニ非ズ。(9)

不自然なフォニク・メソッドは否定している。一方、センテンス・メソッドについては、その理念の片鱗は示唆されているものの、具体的な方法の紹介はなされていない。

Johonnot, J. 著 *Principles and Practice of Teaching* の摘要としては、浅野宗八編輯 (1887) 『摘要如氏教育学』と伊藤小文司翻刻 (1890) 『摘要如氏教育学』の二冊が確認されている。また詳解としては、松村保一・池永輝次著 (1888) 『如氏教育学詳解』がある。これら三冊のいずれにおいても、文章法に関する記述は認められなかった。

センテンス・メソッドの日本への移入については、その示唆的介绍というレベルでは明治十年代後半になされたものの、具体的提言は後の時代を待たなければならなかった。

### 3 『改正教授術』の問題点

我が国の教育界に開発教授が広がる契機となったのは明治16年刊『改正教授術』によるというのは旧聞に属する。また、この『改正教授術』の根本原理は、Sheldon 著 *A Manual of Elementary Instruction* の翻訳によっているという事実も、すでに大正期に吉田熊次によって明らかにされている (10)。

『改正教授術』に見る教授過程例として、幾多の国語教育研究書に紹介される代表的な箇所は次の部分であろう。

#### 第三 順序方法

##### 第一步

##### 一、いろは

##### 教授法一例

一、目的 表現力、再現力、及言語文字ヲ練習ス

二、大意 い字ノ形ト音トヲ授ケ且之ヲ物名ニ適用スルコトヲ教フ

三、題目 い

四、方法

教、いとヲ示シ是ハ何ナリヤ

生、いとナリ

級決 教可

教、物ヲモ示サズロニテモ言ハズシテ人ニ此物ヲ知ラセンニハ如何ナルモノヲ用キ  
ルベキヤ

生、字ヲ書シテ知ラスルヲ得ル

級決 教可 (11)

「いろは」の「い」という文字を教える、まさに入門期の教授例である。読み方教育の方法としては、文字法 (Letter method) といえる。

ところでこの直後に奇妙な文章が記されている。

教、(前ニ書シタルい字ノ傍ニ大ナルい字ヲ書シ) 誰カ之ヲ読ミ得ルヤ  
 生、衆生挙手 各唱 齊唱  
 教、(極小ナルい字ヲ記シ) 誰カ之ヲ読ミ得ルヤ  
 生、衆生挙手 各唱 齊唱  
 教、誰カ来リテ板中ノ最大ナルい字ヲ指セ  
 生、言ノ如クス 級決 教可  
 教、誰カ来リテ最小ナルい字ヲ指セ  
 生、言ノ如クス 級決 教可 (12)

なぜわざわざ大きな「い」の字と小さな「い」の字を書くのか。特別な意味があるとも思えない。奇妙である。

その理由はやはりSheldon,E.A.著*A Manual of Elementary Instruction*の中にあった。「音声の読み」の第一段階は次のような書き出しで始まる。

この段階において、子どもたちは字形の分別と模倣を学び、また音の分別と模倣を学ぶ。それぞれの文字は必ずしも一つの音に当てはまりはしない。最初に子どもたちに小文字 (small letters) の字形とそれに最も適した音を認識させることから指導する。この目的のために、大小のカードと黒板を使う。

教師は「a」の短音を発し、子どもたちに模倣させる。ある程度正確に発音できるようになるまで続ける。次に教師は、小文字 (small letter) の「a」を書いた小さなカードを掲げる。(傍線引用者) (13)

『改正教授術』を著した若林虎三郎・白井毅は、*A Manual of Elementary Instruction*のこの箇所を誤読したと思われる。英語には小文字と大文字があり、ひとつのアルファベットでも二種類の文字を覚えなければならない。この「小さなカード」に記した「小文字」の部分を「小さな字」と誤解したのではないだろうか。そのため、上に記した視力検査のような奇妙な教授過程が生じたものと推察できる。

この一例から結論づけるのは強引かもしれないが、『改正教授術』は*A Manual of Elementary Instruction*を翻案したにせよ、Sheldonの教育思想を充分に咀嚼したうえで上梓されたものとは言いがたい。そのためか「今日から見てひじょうに幼稚素朴なものであった。」(14) という感を抱かせてしまう。

また発問論研究の立場からも次のような批判がなされる。

『改正教授術』も理念としては、空誦暗記を廃して心性開発を唱える。しかし(中略)「学制」期の問答がなぜ注入・暗記の便法と化したかについての発問論的検討をしないで、外形だけ整えることによって心性開発を図ろうとした。そのため、結局、「心性開発」の「心性」は、表現力、再現力、せいぜい省察力にとどまらざるを得ないということにもなってしまった。(15)

このように開発教授思想は、その出発点から充分な咀嚼を経て導入されたものではなかったのである。

#### 4 『小学改正教授法』とワード・メソッド

『改正教授術』が出版された翌年の昭和17年に長谷川絢蔵の編輯による『小学改正教授法』が発刊されている。同書の「緒言」には次のように書かれている。

今開発教授ノ主義ニ基キ菲オヲ顧ミス此書ヲ編輯シ (16)

このように本書も「開発教授ノ主義ニ基」づいた教授法書であった。

その「読書科」の章には、二つの教授方法が示されている。第一は「言語法」と呼ばれている。

言語法トハ単一ナル物名即チ家トカ牛トカ云フ言語ヲ以テいへうしト書シテ教フルノ法ナリ如斯千変万化教授シテ止マサルトキハ自然トいろは四十八字ヲ活動応用スル自在ナリ (17)

ここでは「言語法」と呼ばれているが、その内容からは「いへ(家)」とか「うし(牛)」という、単語の単位で教えるということで、単語法(ワード・メソッド)のことを指しているのがわかる。

第二は「文章法」である。

欧米各国ニ行ハル、文章法ハ既ニ文章ヲナセル句ヲ教授スルモノ (18)

ここで文章法(センテンス・メソッド)が紹介されている。本稿第一章の飛田多喜雄の引用文で示したように、国語教育界では文章法が日本に紹介されたのは、昭和18年の『教育新論』が最初だと思われているが、その1年前の昭和17年に出版された『小学改正教授法』に既に文章法(センテンス・メソッド)の紹介はなされていたのである。

ただし『小学改正教授法』の編輯者長谷川絢蔵は、文章法の方ではなく、言語法(単語法)の方を良しとした。その理由を次のように記している。

言語文章同一ナル国ニテハ此ノ法尤モ可ナルガ如シト雖モ我国ノ如ク言語文章其趣ヲ異ニスル国ニ在ツテハ行フヘカラサルモノナレバ宜シク言語法ヲ用キテ教授スヘシ (19)

これは表音文字を使う欧米諸語と表意文字も使う日本語との相違を言っているのだろうか。あるいは言文一致の問題を指しているのであろうか。いずれにせよ、センテンス・メソッドを退ける本質的理由とはならないため、理由付けとしては説得性に欠ける。

つまり『小学改正教授法』はセンテンス・メソッドを日本に紹介した初期の文献であるとともに、早くにセンテンス・メソッドを却下した文献でもあったのである。

この背景には、まずは文字・単語を習うという、前時代の読み方教育の伝統が先入観

として強く働いていたものと思われる。

次に入門期の教授過程例を見ていく。当時のその影響力から『改正教授術』の教授過程例は、今日の多くの国語教育関係資料等に掲げられている。しかし、この『小学改正教授法』の教授過程例はほとんど紹介されたことがない。そのため、少し長くなるが引用する。

初等科読方教授

いろは教授ノ例 始メテいろはヲ教フ

目的

表現力再現力及言語文字ヲ練習ス

大意

いすナル文字ヲ授ケ且其いノ字ノ応用ヲ教フ

題目

いす

方法

授業上要用ナル処ノ塗板白墨石板石筆木筆等ノ名称用法ハ充分ニ之ヲ示シ置クヲ要ス

教 椅子ヲ示シは何ナリヤ

生 椅子ナリ 級決教可

教 此椅子ヲ見セモセス談シモセズシテ人ニ知ラシムルハ如何ナスヘキヤ

生 字ニ顯ハシ知ラスナリ 級決教可

教 誠ニ然リ独リ椅子ノミナラス凡テ物ヲ見セズ言モセスシテ其物ノ何ニタルヲ人ニ知ラシムルニハ文字ニテ顯ハスヲ要ス然ラハ文字ヲ知ルコトハ甚大切ナルコトナラスヤ

教 誰レカ椅子ノ字ヲ知レルヤ

生 知ラズ

教 然ラハ椅子ノイト云フ字ヲ知ルモノナキヤ

生 一生知ル

教 来リテ塗板ニ書セ

生 来リ書ス 級決教可

(注意) 字形ヲ小ニ書スルハ兒童ノ常ナレハ教師改メテ大書シ各生徒ヲシテ觀易カラシムヘシ

教 誰レカオト云フ字ヲ知ラサルヤ

生 知ラズ

教 然ラハ教フベシ (いノ字ノ傍ニオノ字ヲ書シ) 甲生ニ読マシム

生 読ム

教可指読齊読

教 (いノ字トすノ字トヲ指) 之ヲ一齊ニ読メ

生 読ム

教可指読齊読

教 誠ニ今汝等読ミタル如ク此ノいノ字トすノ字トヲいすト云フ

教 いすノ字ヲ石版ニ写セ (以下略) (20)

『改正教授術』では、「題目」が「い」であり、そこからレター・メソッドを取っているとわかる。それに対してこの『小学改正教授法』では、「題目」が「いす」となっており、そこからはワード・メソッドの原理に拠っていることがうかがえる。上記引用文からは、レター・メソッドを交えつつも、大局的にはワード・メソッドによる読み方教育がなされていたことがわかる。この後、同じ「い」の付く身の回りの単語として「家(いへ)」を取り上げる。そのうえで「いろは図」を掲示し、「い」を学ばせている。

「五十音図」を用いる場合も、ワード・メソッドが取られている。「あたま」という単語を題材にして「あ」を学ばせている。

本書はワード・メソッドの定着過程がわかる好事例といえよう。

## 5 読み方教育論の形成——『読方教術』——

「東京師範学校小学師範科の卒業生で、伊沢・高嶺の教えを受けた」(21) 安積五郎によって明治18年に『読方教術』が編輯された。安積はその「自序」で次のように述べる。

凡教授ニ開発ノ法アリ注入ノ法アリ其是ニ由ルト彼ニ由ルトハ学科ノ性質如何ニ関スルト雖概ネ開発ノ法ニ由ルヲ常トス (22)

開発主義と注入主義とを併記している。一般論として開発主義を推奨しつつも、注入主義の必要性も否定していない。明治18年という、一般に開発教授が席卷していたかのように思われがちな時代にあっても、伝統的注入主義は脈々と受け継がれていたのである。

安積は続けて述べる。

然レドモ読方科ノ如キハ単ニ其一ニ偏スベカラズ二者相待テ始テ其宜キヲ得ベキナリ若シ開発ニ拘泥スルトキハ徒ニ時間ヲ消耗スルノミニテ却テ進歩ヲ碍ルノ弊ナキ能ハズ注入ニ偏向スルトキハ空ク文字ヲ記誦スルニ止リテ其活用ヲ解セザルノ患アリ (23)

開発主義に拠ると時間を多く費やしてしまう。注入主義に拠ると暗記暗誦が中心となり、応用が効かなくなってしまう。両者の短所を端的に指摘している。

安積は続ける。



抑読方ノ目的タル専ラ書ニ就キ其事実ヲ領会スルニアリト雖小学ニ於テハ事実ト文字トヲ授クルニ在リ故ニ小学ノ教師ハ必此目的ニ由ラザルベカラズ其之ヲ授クルノ法文字ハ注入ニ由リ事実ハ開発ニ由ルヲトス (24)

安積は、「読方科」が「文字」と「事実」の両方を学ぶ時間であると整理している。後に「国語」という教科が成立するに伴い、国語教育における形式と内容という課題が生じてくるが、既にこの昭和18年の段階で、〈文字＝形式〉と〈事実＝内容〉という二元論的構造が示唆されていた。

〈文字〉は注入主義で教授し、一方〈事実〉は開発主義で教授するという方針が示されている。小学校入門期の読み方教育の中心は先ずは文字の習得に置かれる。そこにおいては注入主義の教授が重視される方向性が見えてくる。

安積は読方科の性格を次のように指摘している。

第一 実物ノ教授トナラザル様注意スベシ

読方課ニ於テ使用スル実物ハ文字ヲ授クル為メノ方便ニ過ギズ故ニ生徒ノ常ニ能ク知レルモノヲ持チ来スベシ若シ知ラザルモノヲ持チ来ストキハ先ヅ其ノ実物ノ教授ヲナサルベカラズ其ノ実物ノ教授ヲナシ而ル後文字ヲ教フルガ如キニ至テハ是レ実物ノ教授ニシテ読方ノ教授ニアラザルナリ (25)

読み方の教育を実物教授と峻別するよう力説している。文字を学ぶことが第一の目的で、実物の提示はその手段に過ぎないことを説いている。実物教授を中心とした混沌とした教授内容の中から、文字の教授という軸を中心に読み方教育論が形成される過程が読み取れる。

## 6 まとめ

明治十年代後半のこの時期は、開発教授が隆盛した。しかし、開発主義一辺倒になっただけではない。伝統的な注入主義が基盤として根付いており、その上に開発教授の流行は成り立っていた。その開発教授も、後世には次のように評価される。

ペスタロッチーの直観主義は伊澤修二、高嶺秀夫の両氏に依て紹介せられ、所謂開発教授の名を以て広く行はるゝに至つた。併しながら同時に於ける実地教育者は直観主義の本旨を悟らず、開発教授と問答教授とを、はきちがへ何でも問をかけて生徒に答へしむれば開発であると考へた。(26)

読み方教育の状況を見た限りでは、極言を許してもらうならば、開発教授はあたかも浮遊しているかのような心もとなさを醸し出しつつ、決して長くはない流行の時代を演出していた。根強い注入主義の伝統は、その地盤を強固にしつつ次期のヘルバルト派分段教授時代の呼び水となっていた。

読み方教育の方法論の上では、レター・メソッドからワード・メソッドへという進展が認められた。センテンス・メソッドの存在についてはこの時期から言及はされたものの、それが本格的に実践されるのは、大正末期まで時代を降る。その理由は様々考えられるが、ここでは一つを指摘するにとどめる。

石井正司は次のように述べる。

開発教授は教授原理としての直観教授である。(27)

また氏は著書『直観教授の理論と展開』中において、日本の明治期の開発教授を取り上げ、一節を割いている(28)。このことから分かるように、開発教授は、大きくは直観教授的教育思想の脈絡の中に含まれる性格を有していた。しかしここに原理と実際の乖離があったのも事実のようである。実際においては、日本の開発教授は必ずしも「直観主義の本旨を悟」った上で展開されたものではなかった。日本の文化思想史において直観論が本格的に開花するのは大正期であった。「文意の直観」(29)を必須の条件とするセンテンス・メソッドが躍進するには、こうした直観思想の醸成される大正期を待たなければならなかったのである。

#### 【注】

- (1) 牛山恵 (2004) 「読みの指導理論」(田近向一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典第三版』教育出版、p.214.)
- (2) 飛田多喜雄 (1984) 『国語科教育方法論大系10 国語科教育の実践史』明治図書、p.190.
- (3) Luke, E. (1931) *The Teaching of Reading by the Sentence Method* London: Methuen & Co., p.xxii.
- (4) 高嶺秀夫訳 (1885-1886) 『教育新論』(1-4巻) 東京茗会、p.639.
- (5) 有賀長雄訳注 (1885) 『如氏教育学』(上下巻) 牧野書房、下巻p.241.
- (6) Johonnot, J. (1878) *Principles and Practice of Teaching*. New York: D.Appleton and Company, p 300
- (7) Johonnot, J. (1878) p.300.
- (8) 高嶺秀夫訳 (1885-1886) pp.639-640.
- (9) 有賀長雄訳注 (1885) 下巻pp.241-242.
- (10) 吉田熊次 (1922) 『本邦教育史概説』目黒書店、pp.411-422.
- (11) 若林虎三郎・白井毅編纂 (1883) 『改正教授術』普及舎、巻一24丁ウー24丁ウ
- (12) 若林虎三郎・白井毅編纂 (1883) 巻一24丁ウー25丁オ
- (13) Sheldon, E.A. (1862) *A Manual of Elementary Instruction, for the Use of Public and Private Schools and Normal Classes*. New York: Charles Scribner's Sons, p.239.
- (14) 石井庄司 (1983) 『近代国語教育論史』教育出版センター、p.70.
- (15) 豊田久亀 (1988) 『明治期発問論の研究——授業成立の原点を探る——』ミネルヴァ書房、p.110.
- (16) 長谷川絢蔵編輯・柴直太郎校閲 (1884) 『小学改正教授法』有松雲書房、緒言

- (17) 長谷川絢葎編輯 (1884) p.54.
- (18) 長谷川絢葎編輯 (1884) p.54.
- (19) 長谷川絢葎編輯 (1884) p 54.
- (20) 長谷川絢葎編輯 (1884) pp.55-58.
- (21) 石井庄司 (1983) p.75.
- (22) 安積五郎編輯 (1885)『読方教術』栄泉社、序
- (23) 安積五郎編輯 (1885) 序
- (24) 安積五郎編輯 (1885) 序
- (25) 安積五郎編輯 (1885) 27丁オー27丁ウ
- (26) 横山栄次 (1922)「初等教育の実際 森氏時代よりヘルバルト全盛頃迄」(国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、p.191.)
- (27) 石井正司 (1978)「直観教授」(細谷俊夫他編『教育学大事典 第4巻』第一法規、p.274.)
- (28) 石井正司 (1981)『直観教授の理論と展開』明治図書、pp.242-264.
- (29) 垣内松三 (1922)『国語の力』不老閣書房、p.20.

【主要参考文献 (注に記したものを除く。)]

- 浅野宗八編輯 (1887)『摘要如氏教育学』郁文堂
- 伊藤小文司翻刻 (1890)『摘要如氏教育学』環翠堂
- 稲村玉雄・水木梢 (1932)『読方算術新教授法辞典』高踏社
- 松村保一・池永輝次 (1888)『如氏教育学詳解』(1-3巻)池永輝次発行
- 安直哉 (2006)「センテンス・メソッドの思想」(日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』407号、pp.46-51.)